



Title	シャルロット・ペリアンによる1941年の展覧会「選擇 傳統 創造」の図録図版における空間構成手法
Author(s)	庄野, 那奈
Citation	デザイン理論. 2026, 88, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106191
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シャルロット・ペリアンによる1941年の展覧会「選擇 傳統 創造」の図録図版における空間構成手法

庄野 那奈 島根大学大学院在学

はじめに

シャルロット・ペリアン（Charlotte Perriand, 以下ペリアン, 1903-1999）は写真を活用した 20 世紀の建築家のひとりである。彼女は、雑誌やカタログなどの紙面において、また展示・建築空間において写真を利用した。さらに、写真を撮影することによって、構造的なもの、民俗的なもの、自然物や人工物の形態や表面性について研究を行うなど、写真を好んで利用していたことが知られている。

ペリアンは 1940 年に輸出工芸のアドバイザーとして来日した。そして、日本での調査研究活動の成果として、1941 年に展覧会を開催するに至る。この展覧会は「ペリアン女史 日本創作品展覧会 住宅内部装備への一示唆、選擇 傳統 創造」と題され、ペリアンによる作品の選択、展示が行われた。本展では、写真を用いた作品の展示のほかに、展覧会会場の撮影、写真図版を含む図録の編集のすべてをペリアンが指揮している。したがって、この展覧会の図録に、ペリアンの建築と写真の関連を考察することが可能であると考ええる。

展覧会の図録は出品作品の写真やスケッチ、展覧会平面図、さらにはペリアンの過去の作品写真などから構成される 53 枚の図版と、それらに対応する解説文とによって構成されている。この図録は、ペリアンと坂倉順三との共著で出版された。図版と解説文は 1 ページ、あるいは見開きページに一体的に配置されているのではなく、それぞれ明確に分けられ、図版群は巻末にまとめて掲載されている。

写真の撮影：素材の強調

図版に利用された写真の被写体の多くは、展示空間全体よりも展示作品の素材や形態を主題としている。

クローズアップによって撮影された被写体は織物に限定されている。3 枚の図版において、椅子のクッションを覆うために用いられた織物、住居空間展示に用いられた簾をクローズアップで撮影した写真が利用されている。ペリアンは、クローズアップによって素材の質感や肌理を表現し、家具における表面素材の肌触りやその重要性を示そうとしている。

展示空間を撮影した写真では、展覧会開催時に採用された照明計画とは異なる光環境で撮影されたと考えられるものがある。例えば、被写体に対して斜めから高照度の光を当てることで、グラデーションのある陰影によって、テーブル天板側面の樹皮部分の凹凸やテーブル天板上部の年輪の模様が強調している写真がある。この写真では、テーブルの上に置かれた金属製の灰皿が、はっきりとした明暗を生み出すことで、木材と金属の素材のコントラストが強調されている。

図版の制作：素材の多様性と展示作品の解剖

写真が利用された図版 51 枚のうち、2 枚以上の写真を利用して制作された図版は 35 枚あり、ペリアンは複数の写真で複数の図版を制作することで、1 枚の写真だけでは伝えられない内容を示そうとしていたと考えられる。

例えば、ペリアンが来日以前に制作していた金

属製のシェーズロングと、来日後に制作した竹製のシェーズロングの写真を並べて配置することで、家具の骨組み部分における素材の多様性が示されるときともに、制作過程が示されている。

また、組立解体が可能な展示作品を家具の骨組みを含む4つの段階に分けた4枚の写真を並べて配置することで、家具の利用方法、家具への解剖的な視線を示している図版もある。

さらに、簾をクローズアップで撮影した写真の中に、加工が施された展示空間の写真が埋め込まれるフォトモンタージュが用いられている図版も存在する。展示空間が平面的な簾に埋め込まれることで、スケール感が意図的に逆転され、立体的な展示空間と平面的な工芸品の関係が変化し、空間における平面的な簾の重要性が示されている。

図版の配列：素材から空間への連続

想定動線上に配置されている展示作品の順番と、図版の配列順の違いから、ペリアンが図版を配列する過程で重要視したことを分析する。

実空間での想定動線上では、素材、家具、空間の順に展示作品が配置され、展示空間全体は、理想的な住空間の再現に精魂が傾けられていた。一方で、図版では展示作品は素材、生活雑貨、家具、空間の順に配列され、展示空間を撮影した写真が利用された図版は20枚と全体の半分以下である。

図版の配列では、展覧会のテーマを示したのちに、素材、家具、空間に関する図版を配列することで、実空間での作品配置の流れを踏襲している。素材というミクロなものから空間というマクロなものへの連続性をより明快に示すために、実空間での配置順序とは大きく異なった図版配列になっている部分もある。素材に関する図版では、実空間の想定動線上では織物の素材としてではなく、住空間展示の一部として配置された簾の図版を、織物の一部として配列している。さらに、実空間では住空間と庭の中で一体的に展示されていた生活雑貨類は、住空間を示す図版や家具に関する図

版とは明確に分けて配列される。そして、実空間では素材の展示の次に家具の展示が配置されていたのに対し、図版では、素材、生活雑貨、家具の順番で配列される。図版の配列において、素材から、より体と触れることの多い食器などを含む生活雑貨、そして家具というミクロなものからマクロなものへの連続性を示そうとしたためであると考えられる。加えて、住空間展示を構成する要素として点在して配置されていたそれぞれの家具は、図版において、素材ごと、形態ごとにまとめて配列され、これらの共通性をより強調して視覚的に示している。ペリアンは図版を配列するにあたり、実空間で示した以上に、素材の肌触りや肌理を強調したうえで、素材、家具、空間の連続性を表現しようとしている。

おわりに

ペリアンは「選擇 傳統 創造」展の展覧会図録の制作において、図版写真の撮影では、クローズアップやライティングによって、素材感や肌理を強調し、展示作品における素材の重要性を示している。図版の制作では、多様な素材による展示作品のバリエーションや展示作品への解剖的な視線を示し、展示作品と展示空間に対して複眼的な視線を提供している。そして、図版の配列において、素材、生活雑貨、家具、空間の連続を実空間以上に明快に示すとともに、家具を素材ごと、形態ごとにまとめて配列することで、共通点と相違点を視覚的に強調して示そうとしている。

ペリアンは、作品のミクロな肌触りと空間への広がり、あるいは制作の着想の源泉と制作物を連続的なものとして示そうとしている。

おそらくこのような複眼的視野は、ペリアンが実際の制作に向かうときの態度でもあり、図版の編集もまた、単に展覧会の記録、あるいはペリアンの記憶の媒体ではなく、ペリアンの実践の一部となっている。